文化と芸術
文化・芸術研究センター
ニュースレター
Vol.11
March 2010

CONTENTS

巻頭寄稿 1
特別研究紹介 2~5
調査研究報告 6~7
学内活動報告 8

静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1　〒430-8533
●Tel：053-457-6113 ●Fax：053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

日本人の芸術観～夏目漱石と西川一草亭～

学長
熊倉功夫
Isao Kumakura

夏目漱石については誰もが知っているだろうが、その友人の一人であった西川一草亭という花道家の名前を知っている人はほとんどいない。西川一草亭（1878－1939）は京都のいけばなの家元であったが、弟の津田青楓と共に若いころから図案の研究をしたり、芸術に関心があって、漱石とも交友があった。漱石の句に「牡丹切って一草亭を待つ日哉」があるのは、漱石が京都へ旅行している時、旅館で一草亭を待っていた時の作である。

この二人の間で論争めいたことがあった。それは漱石が大正元年（1912）の第6回文展の批評(注1)を東京朝日新聞に書いた時のことで、一草亭はこの漱石の批評に対して「夏目漱石氏へ―『文展と芸術』を読んで」(注2)という文章を書いている。議論の要点は「芸術は誰のためのものか」ということであった。

夏目漱石は第6回の文展を見て不愉快を感じた。文展の権威があがるに従って画家たちが入賞入選に血眼となり、「ひたすら審査員の評価や俗衆の気受を目安に置きたがる」ようになったのは「芸術のために由々しき大事」と漱石は画家の態度を非難した。「芸術の表現は自己の表現に始つて、自己の表現に終る」ものだからだと漱石はいった。純粋にいえば作品が他人に及ぼす影響など一切顧慮する必要はない、ともいった。

この主張を読んだ西川一草亭は、確かに芸術とはその通りであるべきなのだけれど、何か納得できないところが残る。それは何か、と問いつめてみると、芸術は自己のためであると同時に、他人の胸中に生きるという面があるのではないか、という考えに至った。

芸術は自己以外の人間を認めて、自己を投げ出して他人の胸中に生きようとする努力である。（中略）自己の肉体と血管の中に充実する或る物を推し拡げて之を他の肉体と血管の中に生き度いと云ふ努力であります。言葉を換へて云へば自己を拡大する。

西川一草亭にいわせると、批評家などの目を気にすることはないが、芸術におけるメッセージ性こそ大切で、自分の思いを他者に伝えることこそ、その目的である。その意味で芸術は「自己に始まつて他者に終ると云つた方が至当ぢやないかと思ふ」と記している。

漱石から見るとこの一草亭の議論は芸術以前の問題で、いわば「愛と愛のやりとり」のようなもの（津田青楓宛漱石書簡）(注3)といえようが、それだけでは片付けられない問題が一草亭の主張にあると、私には思える。つまり一草亭がいう、人間どうしが互いにぶつかりあって生み出す共感の世界こそが日本の伝統的な芸術を支えてきたのではないか。

一草亭はこんな例をあげている。南部太夫の浄瑠璃を聞いた感動である。

南部の伊賀越をきいてゐる中に、平作がどうかする場所で非常に感動されて興奮してゐる刹那、場の片隅から五十位な婆さんが忽ち大声を張りあげて「なんでこんなによいのやろふ」叫び出した時、私は非常な満足、腹の底に滲み透る程の満足を感じました。

その女性は周囲に誰もいなくても声をあげたにちがいない。しかしその奥底には、同じ感動を受けている人が共にいることを無意識であっても信じていたにちがいない、と一草亭はいう。こうした感動の共有こそ芸術に求められるとしたのである。

現代のわれわれの周辺を見回すとき、かえって漱石のいう芸術より、一草亭のいう芸術の方が求められているのではないか。さてそこであらためて問われるのは、作者の思いの深さではあるまいかと考えるが、いかがであろう。

（注）1 夏目漱石「文展と芸術」（『漱石全集』11巻,389ページ）
2 西川一草亭「夏目漱石氏へ」（『風流生活』203ページ）
3 夏目漱石書簡（『漱石全集』15巻,199ページ）

特別研究紹介 1

（平成21年度文化政策学部長特別研究）

静岡文化芸術大学開学10周年記念 メディア･スポーツシンポジウム

「グローバル化するスポーツ文化 ～ジャーナリズム、メディア・スポーツの将来とは～」

溝口紀子（文化政策学部国際文化学科）

＜総括＞

平成21年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究「身体文化とメディアの融合と創造」の成果として、平成21年8月1日(土)、静岡文化芸術大学開学10周年記念「メディア･スポーツシンポジウム」を本学講堂および176教室にて開催した。当日は一般市民、スポーツメディア関係者約300人が参加した。シンポジウムでは、日仏のスポーツジャーナリストを招き、メディア･スポーツシンポジウム「グローバル化するスポーツ文化ージャーナリズム、メディア･スポーツの将来とはー」をテーマに、日仏のスポーツメディアの特徴やメディア･スポーツの将来について議論を交わした。パネルディスカッションの後、会場参加者との質疑応答が行われたが、多数の参加者から質問が投げかけられ設定時間が足りないほどであった。シンポジウムを成功裏に収めることができご尽力をいただいた本学教職員の皆様、またパネリストの皆様に心よりお礼を申し上げたい。本稿ではシンポジウムのパネルディスカッションの一部の内容についてご紹介する。

＜パネリストの紹介＞

コーディネーター:溝口紀子　パネリスト:カリム･ベンイスマイル氏（L'EQUIPE　闘技編集長）、フロリアン･カロウアズ氏（EUROSPORTS サッカーディレクター）、西森大氏（NHKスポーツディレクター）、田村修一氏（日仏スポーツジャーナリスト）※フランス語逐次通訳兼パネリスト、河合純一氏(シドニー、アテネパラリンピック競泳金メダリスト、北京パラリンピック競泳銀メダリスト、静岡県総合教育センター指導主事)

日本とフランスにおけるスポーツメディアの特徴

溝口:日本メディアからみる海外やフランスメディアの特徴などお話ください。

河合:日本ではその時のイベントや大会に関する質問というのが一般的ですが、海外メディアでは思いもよらない質問がくるんですね。例えば中国の記者から、「今日は中国では月餅を食べる日ですが、月餅を食べましたか?」と聞かれ、周りの選手と戸惑うことがありました。しかし、場の空気が緩んだり、親近感を感じ新しい取材方法かとおもいました。

西森:日本選手は政治的な質問をされると避け、「自分たちは自分たちのサッカーをするだけです」とか、「自分は泳ぐだけです」としか答えてくれない。それに対してフランス選手をはじめ、ヨーロッパの選手は自分の意見をメディアに対して言うことができますね。

田村:選手自身の個性がはっきりしていて、ジャーナリストがした質問に対して、ジャーナリストにも意見を求めることがある。明確な意見や言葉をもつことを大切にしてそれに応えられることで対等な関係を築きあげているとおもいます。

溝口:フランスメディアからみる日本メディアの特徴、取材方法や選手の対応の違い等お話しください。

ベンイスマイル:まず最初に驚いたのは、仕事の仕方で日本メディアのひとは常にグループでみんな一緒に仕事をしている。フランスはそれとはまったく逆なわけです。たしかに仕事が終わった後は、みんなで食事にいきますけど仕事の時は、お互いの競争であり、ある意味戦いであり、誰が最初にスクープをとるか、その為のポジション取り、そういうのがすごく大事ですね。ひとつ例をあげると、アテネオリンピックの100m決勝のレースが終わった後、私と私の同僚のジャーナリストの二人で金メダルをとった選手のドーピングが終わるのを2時間トイレに隠れて待っていました。ようするに彼のインタビューを一番にするために待っていたのです。こんな風にぎりぎりのところで仕事をするわけですね。つまり誰にも得られない情報を読者に提供する。それはたとえテレビでも得られないような情報を自分たちの読者に提供するためにぎりぎりのところまでやる努力を常にしています。

溝口:フランスのメディアは、スクープに対してのモチベーションがものすごく高いですね。独占スクープをとりたいという思いが本当に強いとおもいます。

西森:逆に日本は横並びに意識が強いですね。いわゆる「特落ち」、自分のところだけコメントがうまく取れないことがそうですが、そういうことをすごく恐れますね。だから記者クラブに行って、取れなかった人は周りの記者にお願いして教えてもらいます。そうすると新聞とかにでてくるのが一緒になっちゃうんですよね。そういうところから独自性をだしていくか、ある程度みんな同じ土壌でやってそこから少しずつ違いを出していく感じがします。

ベンイスマイル:西森さん、日本が特落ちを恐れたり、新聞なりテレビなりが同じものを書いたり放送するのに、どうして一般の人は、朝日新聞を選んだり、NHKを選んで観たりするんですか。

西森:この質問は会場にいるみなさんに聞きたいですが、それでも書き手やディレクターの微妙なニュアンスなどはでるとおもうんですね、スポーツの好きな人はそういった微妙な違いを好んで選んでいるのではないかとおもいます。

以上紙面の都合により割愛するがメディア･スポーツの概念、将来の課題について充実した議論になったことを申し添え、筆を置きたい。

本学講堂で行われたメディア･スポーツシンポジウム、パネルディスカッション

特別研究紹介 2

（平成19～21年度学長特別研究）

「富士とジャポニスム ～世界に認められた静岡の美」展覧会

立入正之（文化政策学部芸術文化学科）

1.趣旨

フランスをはじめ、19世紀ヨーロッパとアメリカの芸術にまで強い影響を与えたジャポニスム（日本趣味）において、京都、日光、箱根などとならび、静岡の風景や文化が果たした大きな役割について、静岡人の認識度は高くないと言える。

本展覧会はジャポニスムにおける静岡の自然風景･文化事象が与えた影響を再確認し、富士や旧東海道の景色を日常として考えている静岡人にその影響を広く紹介することで、静岡人が地域の素晴らしさをあらためて実感し、郷土を再評価するきっかけなることを目的のひとつとした。

また、静岡の風景が描かれた江戸時代の浮世絵が、19世紀半ばから20世紀初頭のヨーロッパ人にどれほど大きな影響を与えたのかを、浮世絵とその影響を受けたであろうモネやリヴィエールそしてゴッホなどのフランスや周辺諸国の絵画を比較して影響関係を調査し、同時にその他の芸術と、同時代のヨーロッパ人の文化にも調査対象をのばして、ジャポニスムの影響がより広範に及んでいたことも検証した。

駿河や遠江、富士の地名が150年以上前からヨーロッパで認識されており、そして自分の土地が国際的な文化動向に影響を与えたという事実を認識することで、静岡人が美しく豊かな郷土を誇りかつ、感謝、畏敬の念を抱きうるし、人々の愛国心や愛郷心にもつながるであろう。

2.開催に向けて

平成19年より展覧会に向けた本学文化政策学部芸術文化学科の学生主体の研究プロジェクトチームを結成した。なお、共同研究者として片桐弥生准教授がジャポニスムと日本美術に関連する分野の統括で参加した。

プロジェクト2年目となる平成20年度には本学文化政策学部とデザイン学部の両学部の学生を中心とした実行委員会を組織し、さらに、本学教員･学生のほかジャポニスム研究者や近隣美術館の学芸員ら本学外部の研究者との共同調査･展示作業をおこなった。

3.展覧会と関連イベント

①展覧会構成

出品作品は学生制作の複製絵画作品（写真印刷）とオリジナル作品の混成であるが、富士山ほか静岡各地を取り上げた浮世絵版画作品の複製、それらから影響を受けて描かれたヨーロッパ絵画の複製など約80点とし、展覧会は次の4部構成とした。

「序章」:パリ万国博覧会などで紹介された日本の美術作品から影響を受けたゴッホらの絵画5点を展示した。

「1章　海を渡った日本絵画と静岡」:日本で描かれた絵画作品の中から、ヨーロッパ美術に大きな影響を与えた富士山、静岡の風景を描いた絵画を中心に紹介した。

「2章　静岡と西洋美術」:静岡、特に富士山を描いた日本絵画から影響を受けたヨーロッパ絵画を紹介した。

「3章　静岡文化の継承と世界への発信」:伝統工芸、漫画、イラストレーションなど、「静岡」にちなんだ作家や作品を取り上げ、絵画の枠にとらわれない様々なジャンルの作品を紹介した。

②入場料は無料で、会期は10月8日（木）～18日（日）、開館時間は9:00～18:00（9日は9:00～21:00、14、16日は9:00～20:00）であった。

③本学ギャラリーは、通常開館時は開口部（ガラス窓）を閉めることにより、建物外部より見えなくしてしまうが、本展開催時は開口部を開放することより、外部（浜松市循環バスくるるバス停側）より内部空間を見えるように展示した。

④期間中に次のイベントを開催した。

「浜松創造カフェ vol.2『COOL SHIZUOKA!!』」:片山泰輔准教授を中心とした浜松創造都市協議会主催のイベントで、展覧会キュレーター（学生実行委員長など）のギャラリートークをおこない、その後カフェを開いてアートと浜松について語り合う場を提供した。

「ギャラリーコンサート」:永井聡子講師のプロデュースのもと、ソプラノ（盛かおる）とピアノ（榊原祐子）によるコンサートをギャラリー内で開いた。ジャポニスムにちなんだドビュッシー、フォーレ、グノーらの曲を演奏した。

まとめ

当初予定より会期を1週間短縮し、また初日は台風の影響で開場が大幅に遅れることとなったが、会期11日間の来場者数は1300名近くになり、その内の500名以上が学外者であった。さらに会期中に5日あった土日祝日の来場者数は250名ほどである。前記の会期中イベント参加者はそれぞれ100名近くである。多くの関係者の御理解、御支援そして静岡県内外の多種媒体の広報協力の成果であったと考える。

おわりに、本展覧会が教員指導のもと、総勢20数名のプロジェクトチームの両学部学生が企画運営をしたことも極めて意義のあることと総括したい。本学のみならず、大学付属ギャラリーの今後についてはさらなる可能性と発展を期待したい。

会期:平成21年10月8日～18日（11日間）
主催:本学
後援:浜松創造都市協議会
協賛:（財）はましん地域振興財団
学長特別研究（平成19、20、21年度の3年間）

特別研究紹介 3

（平成21年度文化・芸術研究センター長特別研究）

「メディアアートフェスティバル&メディア芸術祭」について

長嶋洋一（デザイン学部メディア造形学科）

1.はじめに

本学の特長である芸術文化マネジメント、デザイン学部のアートとサイエンス（技術と感性）の結び付いたメディアアート戦略を、将来に向けたSUACの重要な柱の一つとして研究している。本稿ではその中で、文化庁メディア芸術祭浜松展と合体して2009年10－11月に開催したメディアアートフェスティバル（MAF2009）について紹介する。

2. イベントの概要

2001年から毎年開催しており、SUAC発信のイベントとして国内でも知名度の向上しているメディアアートフェスティバル（MAF2009）は、しずおか国民文化祭の企画の一つである「文化庁メディア芸術祭浜松展」と合体して、2009年10月30日(金) から11月3日(火／祝)の5日間、開催された[1]。SUACが国内外の専門家や作家と連携して単独で開催してきたイベントと、政府が国を上げてコンテンツ立国のために振興するイベントとの合体は、まさに「メディアアート」時代の象徴であると言えよう。会場としてSUACの施設をフル活用したが、文化庁メディア芸術祭浜松展[2]の展示企画はSUACのMAF企画とは別であり、両者合体したプログラム冊子においては、それぞれの表紙から中央部分に関連する企画が記載される、というユニークな形態をとった。以下、それぞれの展示企画について報告する。

3. 文化庁メディア芸術祭浜松展

開催期間中、映像作品の上映会とインスタレーション作品などの展示が連続して開催される(後述)とともに、単発の企画として国内各地からも来場者が殺到した企画として、シンポジウム「音楽がアニメーションをどう変えるか」が11月3日(火／祝)に開催された。会場の講堂は全国からの抽選申込者で完全に満席となり、アニメ音楽の作曲家として人気の作曲家・菅野よう子氏が呼んだ、「攻殻機動隊」監督の神山健治氏、「カウボーイビバップ」「Genius Party」監督の渡辺信一郎氏とともに、アニメにおける音楽をピアノ即興演奏とともに熱く語る、素晴らしい企画であった。11月1日(日)には、前年の文化庁メディア芸術祭でエンタテインメント部門の大賞を受賞した、ヤマハ「TENORI-ON」ワークショップが開催され、これも事前申込の来場者が殺到した。

ギャラリーおよび文化芸術研究センターを会場とした、ゾーン1「音を奏でる」では、アート部門、エンタテインメント部門の中からoto にまつわる体験型作品やゲームのスクリーン展示など、約20作品を展示し、実験的ライブパフォーマンスの映像も併せて紹介した。ゾーン2「音を読む」では、文化庁の定義ではメディアアートとされる「マンガ」の、「音」をテーマとした「マンガ／パネル展示」と「マンガ閲覧スペース」を設けた。講堂を会場としたゾーン3「音を観る」では、音楽と映像がメッセージ性を携えてコラボレーションしながら、人間の感覚に対して相互横断的な役割を果たすミュージックビデオやライブパフォーマンスビデオ、サウンドデザインが作品世界を強く印象付けるアニメーションの上映を行い、長編映像作品としては「Genius　Party」(渡辺信一郎　　他)、「カウボーイビバップ　天国の扉」(渡辺信一郎)、「攻殻機動隊STAND　ALONE COMPLEX　Solid State Society」(神山健治)の3作品を上映した。

撮影スタジオを会場とした連続上映会場では、第12回文化庁メディア芸術祭の短編映像作品を集めた上映プログラムと、過去のメディア芸術祭受賞作品から音をテーマにセレクトした「otoセレクション」とを交互に終日上映した。

4. SUACのMAF2009

前年に続いた企画として、MAF2009　シンポジウム「国立メディア芸術総合センターを考える」では、「国営マンガ喫茶」等とも揶揄され無駄づかいの象徴のように批判され議論されたのを受けて、日本文化政策学会との共催のもと、コンテンツ学会の協力を得て、この問題に関しての学術的かつ政策指向の議論を行う場としてシンポジウムを開催した。政権交代直後という情勢のため予定されていた文化庁の官僚の出席はキャンセルとなったが、専門家の議論は注目された。

これも前年に続いた企画として、「フィジカル・コンピューティング」ワークショップでは、全国各地からの事前申込者を対象に世界先端のメディア技術の実演講習と、総合演習室を会場としたメディア・パフォーマンスを行った。

その他の展示・上映企画としては例年と同様に、「インスタレーション・ギャラリー」（招待展示の筑波大学3作品を含む18作品）、「ムービー・シアター」（14作品）、「Flash／Web　ギャラリー」（17作品）、「SUAC学生CGギャラリー」（12作品）の発表展示を行い、来場者にも好評を得た。地域の企業や県民市民においても、9年間続いたSUAC発のメディアアートはさらに印象付けられる企画となった積み重ねを受けて、さらに10周年、その先、と世界に発信していく場として機能していきたいと考えている。

[1] http://1106.suac.net/MAF2009/
[2] http://plaza.bunka.go.jp/hamamatsu/

特別研究紹介 4

（平成21年度文化・芸術研究センター長特別研究）

「しずおかユニバーサルデザインの絆in浜松」を終えて

古瀬　敏（デザイン学部空間造形学科）

静岡県がユニバーサルデザインを重点事項としてから10年以上経過した。浜松市もすぐそれに続いてユニバーサルデザインを取り入れ、以後静岡県と浜松市は自治体が自ら行えるさまざまな施策（街路や公的建築物整備）については率先して予算を投入するなどして、ずいぶん整備が進んでいる。たとえば、浜松駅から静岡文化芸術大学があるブロックまでの再開発に当たっては、広々とした歩道の整備も含めてユニバーサルデザインの原則を踏まえる形で施策がなされているし、建築物もよく考えられていて誰もが使いやすい水準になっている。

しかし、ユニバーサルデザインがほんとうに浸透するためには、そういった役所が行うことだけでなく民間における活動にまで理念と実践が波及しなければ意味がない。本学ではこの点を意識しての研究をしばらく続けてきているが、その一環としてできるだけ国際シンポジウム開催などの形でユニバーサルデザインの推進を支援しようとしてきた。とくに2010年10月から11月にかけて浜松市アクトシティで「国際ユニヴァーサルデザイン会議」が予定されていることから、そのプレ・イベントとして2009年12月4日と5日に「しずおかユニバーサルデザインの絆in浜松」が、本学、静岡県、浜松市、そして国際ユニヴァーサルデザイン協議会（IAUD）との共催で開催され、講演や展示などが行われた。

このうち講演などは初日に設定され、評論家の樋口恵子氏による記念講演「誰もが暮らしやすい高齢社会への提言」、そして樋口氏に赤池学、原田博子、高野裕章各氏を加えて筆者が司会してのパネルトーク「次の世代に今できること」、さらに米国から招へいしたスティーブ・デモス氏（ヒューマンセンタードデザイン研究所）による特別講演「ユニバーサルデザインの来し方、行く末」がそれぞれ行われ、さまざまな試みの成果の評価と今後の方向を探った。

樋口氏にはわが国において少子高齢化の抱える問題を指摘してもらい、赤池氏からはわが国におけるキッズデザインの流れなどの紹介を、原田氏からは浜松市と連携しての子育て支援のための活動の報告を、また高野氏からは富士宮市での新たな形での公共交通の仕組みの報告をそれぞれお願いした。こうした地元での実践事例を踏まえての討論では、そういった地道な試みが暮らしやすさにどのように寄与しているかを議論した。全体を通じての議論では、さまざまな主体の参画が重要であること、目先のことのみでなく長期的な視点が必須であること、などが強調された。それは無視されていた利用者を掘り起こして表に出すことを通じて「すべての人のために」の実現に近づくことになるし、また同じような失敗を繰り返さないためにも重要であると指摘された。

スティーブ・デモス氏からは、米国におけるユニバーサルデザインのこれまでの到達点と今後の方向性についての報告が行われた。当初の計画ではユニバーサルデザインの母と言うべきイレーン・オストロフ氏を招くことになっていたが、体調不良のために彼女の来日が不可能となったことから、講演のカバーする範囲が意図したものよりは狭く、都市・建築のユニバーサルデザイン中心になってしまったのは、やむを得ないこととは言え残念であった。

なお、講演とパネルトーク以外では、とくに企業におけるユニバーサルデザイン事例を紹介する展示と、ユニバーサルデザインを踏まえての解決策を当事者とデザイナーが議論して提案する48時間デザインマラソンなどが実施された。このデザインマラソンはこれまでもいろいろな機会に何回か実施されているが、本学では初めてで、IAUDが主導して行われた。具体的には会員企業に属するデザイナーたちがグループを構成し、アドバイザーとしてそのグループに加わった「障害を持つ当事者」が抱えている問題点を把握して、それに対しての解答を提案するという仕組みである。今までの殻を破っての発想が求められることから、この手法はデザイナー教育・訓練としてもすぐれたやり方であると認められている。議論をして解決案を探っている現場は一般には公開されないが、関係者としてそっと覗いてみると、短期集中決戦の緊張した空気がみなぎっていることがわかる。実施に当たっては本学の学生の数人が作業アシスタントとして加わったが、それが彼らにとってまたとない経験になったのは疑いがない。2010年秋開催の国際会議に際しても同様なデザインマラソンが企画され、それに本学学生がアシスタントとして積極的に加わることができるよう期待している。

調査研究報告 1

都心再生フォーラムを開催して

阿蘇裕矢（文化政策学部文化政策学科）

はじめに

浜松市では、平成11年3月と平成19年8月に、それぞれ中心市街地活性化に関する計画を策定した。後者は、法律の一部を改正したことによる（「中心市街地の活性化に関する法律（平成18年法律第54号で改題）」）。

浜松市でも、より積極的な中心市街地の活性化を促進するために計画範囲の縮小も含めて計画を見直している。しかしながら、その後、活性化方策の核となる大手百貨店の出店解消など、新たな社会経済情勢の変化に伴い中心市街地の活性化は一向に進んでいない。

筆者は、平成11年9月より浜松市中心市街地活性化（都心にぎわい市民会議）に参加し、当時の市長が提案する市民参加の議論や活動に参加してきた。さらに、平成17年7月からは、浜松市が所管する浜松まちづくりセンターの運営会議委員長の立場にある。この組織を通して、昨年から中心市街地再生についての市民の声を聞く機会が増えてきた。いずれも、閉鎖されたままの旧松菱跡地を含めた、再生に対する批判と意見である。こうした市民の声に対して何かできないかとの思いからフォーラムを立ち上げることにした。活動の全体は、中間支援組織としての浜松まちづくりセンターの活動と静岡文化芸術大学の地域貢献活動というかたちで進めてきたものである。

1.フォーラムの概要

フォーラムのねらいは、「挫折した都心活性化事業を、市民自らが今一度考える」とし、参加する市民は、個々の発言に責任を持たなくていいという条件を付け、3回程度の開催を意図してはじめた。

1回目を平成21年8月30日(日)に本学にて開催し、2回目を同年11月7日（土）東小学校にて開催した。これらを踏まえて、別途、オフ会を企画し、同年12月13日（日）、平成22年2月6日（土）にそれぞれ開催した。3回目は、平成22年2月20日(土)本学において開催した。

(1)第1回フォーラム

最初のフォーラムは、『大激論！　今こそ夢ある都心再生を考えよう』とし、浜松にとって“都心”は、必要か、必要でないか!?　市民一人ひとりが、考え、議論してみませんか?というチラシを配り、国政選挙の中、約130名の参加があった。

名城大学の海道清道教授による基調講演「賑わう都心の戦略とデザイン」を行い、今日における都心再生の問題がどのような状況にあるかについて、参加者が共有化し討議を行った。海道先生を中心に参加者と議論を行ったが、終了時に行ったアンケートには70通を超える回答があり、市民の真剣な意見を集約することができた。

(2)第2回フォーラム

2回目は、『大激論！今こそ夢ある都心再生を考えよう（第2弾）』をテーマに掲げ、東京大学の大西隆教授による「都心再生への道筋・市民提案のあり方」の基調講演を行った。次いで、1回目のフォーラムにおける参加者の意見をまとめた「都心再生に向けた市民提案（たたき台）」について説明し、大西先生を中心に参加者との討議を行った。当日は、様々なイベント等と重なった模様で、約40名程度の参加であったが様々な意見があった。

(3)オフ会（1回目）

3回目のフォーラムに向けて、これまでの市民意見をどのようなかたちで討議していくべきかの議論が必要との提案から、オフ会を開催した。当日は約20名の参加があり、副市長、市会議員、地元関連企業などのスタッフが参加するなか、より具体的な絞り込みの必要性などが討議された。

(4)オフ会（2回目）

引き続き20名の参加を得てオフ会を開催し、市民提案の内容について討議した。しかしながら、より重要なことは、なぜ都心再生への動きが出て来ないのかでありそれを討議すべきという意見と、より具体的な市民提案の内容を議論すべきという意見が出された。

(5)第3回フォーラム

テーマを『夢ある都心再生を目指して　市民から提案しよう!』とし、都市計画家の蓑原敬先生による講演「浜松は次のゲームにも勝ち残れるか?一次の時代のゲームは、競走より連帯、個人プレーよりチーム・プレー」の後、参加者との質疑応答形式で討議が行われた。次いで、「都心再生に向けた市民提案（案）」を説明しパネルディスカッションに移った。中川隆さん（（株）ザザシティ浜松代表取締役社長）、御園井智三郎さん（浜松商店界連盟青年部長）、石田美枝子さん（「冬の蛍」第1回実行委員長）、山崎泰啓さん（浜松市副市長）、蓑原敬先生の5名のパネリストにより討議が行われた。その内容は、どのようにすれば都心再生は動くのか、さらに具体化に向けて何が重要かといった意見が出され熱心な討議が行われた。

都心再生は、現在、大変重要な局面にあるとの認識から、引き続き市民参加による討議を行うことにした。

2.成果と課題

本市の都心再生は、市民の問題意識を醸成することによってそのきっかけを掴むことができないかという期待のもと、フォーラムというかたちで問うことにした。回を重ね学びあい、討議を重ねて行く過程で市民の率直な意見を聞くことができたこと、そのことが問題の本質を抉ることにつながったと認識している。その一方で、市民の力にも限界があり、専門家を含む多様な主体との連携の必要性も感じた。

3回目のフォーラムで蓑原先生が指摘したように、行政のリーダーシップの重要性、政治の決断力が求められる。リーダーシップとは、民間が動くことに対する支援、コーディネート、必要に応じた補助・助成、制度的な対応（特例措置など）を積極的に行うといった内容である。さらには商業者、土地所有者などを含めた都心再生に向けた問題意識の共有、一丸となった取組みが必須である。若干ではあるが、各主体間における問題意識の共有化ができたのではないかと考える。引き続き、次年度も残る課題の解決に向けた検討を行って行きたい。

フォーラムは、浜松まちづくりセンター長の石川岳男さんとともに進めて来た。ご支援いただいた関係各位に感謝申し上げます。

調査研究報告 2

放鷹文化講演会 ～静岡から発信する放鷹の伝統と美～

二本松康宏（文化政策学部国際文化学科）

平成21年11月14日（土）、静岡市において「放鷹文化講演会」が開催された。「放鷹」とは、いわゆる「鷹狩」のことである。

午前には駿府公園を会場として諏訪流放鷹術保存会による放鷹の実演が披露された。諏訪流放鷹術は信州の諏訪大社の贄鷹の神事（鷹が捉えた獲物を神前に供える）に由来する流儀である。伝説の鷹匠・禰津神平貞直を祖と伝え、戦国時代には禰津政直（松鶴軒）や小林家次（家鷹）といった著名な鷹匠たちを輩出している。禰津松鶴軒は武田信玄に仕え、後に徳川家康に仕えて上野国豊岡（群馬県高崎市）に5000石の所領を与えられた。その家督を継いだ甥の信政は10000石の大名になっている。ちなみに「鶴」は鷹の一種であるハイタカのことである。いっぽう、小林家次は織田信長に仕え、「鷹」の字を許されて家鷹と名乗ったと伝えられる。後には徳川家康に仕えて旗本となり、小林家は公儀鷹匠の職を継承してきた。現在の諏訪流はこの小林家に受け継がれたものである。明治維新の後、第14代小林宇太郎は宮内省に出仕したが、実子がいなかったため、諏訪流宗家は弟子の福田亮助、花見薫によって相伝されることになる。当代の宗家は田籠善次郎氏。昭和天皇に仕えて「天皇の鷹匠」と謳われた先代・花見薫氏から宗家の允許を受け、諏訪流第17代宗家を継承している。

午後は静岡市葵生涯学習センター「アイセル21」を会場に公開講演会が開かれた。講師は本学の須田悦生特任教授と慶応義塾大学の岡崎寛徳氏である。須田特任教授は文学や芸能、絵画の観点から鷹の文化史を講じた。岡崎氏は若手ながら『鷹と将軍―徳川社会の贈答システム―』（講談社選書メチエ）を上梓している。講演のテーマも徳川家康の鷹狩と駿府との関わりそのものである。公開講演会の企画・運営は鷹書研究会が担当した。同会は、山本一氏（金沢大学教授）、中本大氏（立命館大学教授）、二本松泰子氏（立命館大学客員研究員）らが発起人となり、文部科学省の科学研究費補助金を基に日本中世の鷹術の世界に伝えられた「鷹書」の総合的な研究を行っている。放鷹の「実践」を伝える諏訪流保存会と、放鷹の「学術」を切り拓く鷹書研究会との、まさに「放鷹文化」のコラボレーションが駿府のまちで実現した。

徳川家康は鷹をこよなく愛した武将として知られている。秀忠に将軍職を譲り、大御所となって駿府城で暮らすようになってからは、それこそ鷹狩に明け暮れた。禰津松鶴軒や小林家鷹にかぎらず優れた鷹匠たちを何人も召し抱え、高禄をもって遇している。江戸幕府の職制において鷹匠頭の役高は1000石。これは長崎奉行や駿府町奉行に等しい。その他の鷹匠たちも身分は旗本である。

公開講演会（アイセル21にて）

将軍が鷹狩を催すと、鷹が捉えた鳥は「御鷹之鳥」と称され、その料理を振る舞われることは大名たちにとって非常な名誉とされた。「御鷹之鳥」は鶴を最高として、とくに「御鷹之鶴」とも称される。「御鷹之鶴」を振る舞われるのはさらに格別の名誉である。鷹は、自分よりもはるかに大きな鶴に襲い掛かるとき、鶴の頭を足で掴み、水に浸して窒息死させるという。これを鳥筏といい、その様子はまるで鷹が鶴を筏に見立てて乗るかのようだという。

諏訪流放鷹術保存会と本学の学生スタッフ
（駿府公園徳川家康公像の前にて）

しかし、なぜ鶴が第一の獲物なのか。ただ「見栄えがするから」というだけの答えでは物足りない。そう思っていた矢先、田籠氏が本学へお越しになり、学生たちに放鷹文化と諏訪流についての講義をしていただく機会を得た。その講義の中に思いがけない手がかりがあった。田籠氏の教示によれば、我が国の鷹狩は、まず稲刈りが終わった秋の田で、そこに降りてドジョウや小魚をついばんでいる鶴を狙うという。「秋の田に降り立つ鶴。それを仕留める鷹」。その構図がイメージされたとき、謎は解けた。

古来、鶴は秋の田に降り立つとされてきた。『万葉集』などでは鶴の古名を「田鶴（たづ）」という。田で稲の落穂をついばむような姿が印象的であったのだろう。そこで気になる伝承がある。昔、金持ちの長者さまが、福徳に奢って、こともあろうに餅を弓矢の的にして興じた。餅の的は「白鳥」に変じて空へ飛び立ち、やがて長者は没落したという話である。「餅の的」という。私は、ここでいう「白鳥」とは「鶴」のことではないかと考えている。稲穂を刈り取った後の秋の田に降り立つ鶴は、冬のあいだ水田にとどまる稲魂（穀霊）の化身なのだ。鷹を使ってその稲魂を捉える。それは、やがて虚空に飛び去ってしまう前に稲魂を水田にとどめるための呪的儀礼だったのではないか。そう考えると、稲魂（穀霊）を祭る皇室にとって鷹狩が王権の営みであったことも納得できるが、紙幅の都合もあり、詳しい考証は別の機会に述べたい。

諏訪流放鷹術保存会や鷹書研究会の活動により、放鷹文化への関心が高まりつつある。その研究は、自然との共生、歴史学、文学、民俗学といった各分野から注目されている。鷹狩の文化は朝鮮半島から中国、中央アジア、アラブ諸国、そしてヨーロッパへと繋がってゆく。それは「絹の道（Silk Road）」に倣えば「鷹の道（Falconry Road）」とでも言うべき文化伝承の道である。

駿府城址には左腕に鷹を据えた徳川家康の像が建つ。鷹狩を愛した徳川家康ゆかりの駿府のまちは、「鷹の道」がたどり着いた、いわば「放鷹の都」ともいえるだろう。

※放鷹文化講演会の開催にあたっては、鷹書研究会、諏訪流放鷹術保存会のほか、静岡市（共催）、静岡新聞・静岡放送、テレビ静岡、あさひテレビ、静岡第一テレビ、NHK静岡放送局（以上、後援）、久能山東照宮（特別後援）に格別のご支援を賜った。この場をお借りして篤く御礼を申し上げます。

学内活動報告 1

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2009を開催

文化·芸術研究センター

「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2009」が2009年10月からの12月までの3ヶ月にわたり開催された。本学の室内楽演奏会は2005年から毎年行われているが、本年の特色はこれまで主として会場となっていた音楽専用ホールや公共の文化ホールなどではなく、本学キャンパス内の様々な空間から、多様な構成の室内楽をシリーズとしてお届けしたことである。

将来の一流演奏家を目指す東京藝術大学の学生演奏者を招いた10月の演奏会では、いつもは展示会などが催されている本学ギャラリーにグランドピアノと椅子を運び込み、ひとときの演奏空間が仕立て上げられた。大学の西側道路を通行する人たちからも演奏の様子が見えるオープンな演奏会は、ピアノ連弾、チェロとピアノ、ピアノ三重奏と演奏スタイルも様々に、学生演奏者による若々しくも質の高い演奏が展開された。

11月には英国を中心に活動する名ヴァイオリニスト相曽賢一朗氏とフォルテピアノ、チェンバロなど優れた鍵盤楽器奏者として著名な上尾直毅氏の2人が本学講堂に登場し、息の合った素晴らしい演奏を披露するとともに、本学小岩准教授を交えての鼎談も繰り広げられ、本学室内楽演奏会の歴史に新たな1ページが加えられた。

12月の演奏会では、本学室内楽演奏会の初期からお馴染みのフォルテピアノ演奏の第一人者、小倉貴久子氏を中心とする「フォルテピアノと木管アンサンブルの饗宴」が文化·芸術研究センターホールで実現し、本学平野教授の解説も加わって、ユニークなデザインの多目的空間は、その日1日室内楽(Chamber　Music)演奏のための「広間」(Chamber)となったのである。

例年通りこれらすべての演奏会の準備やステージマネジメントには芸術文化学科の学生チームが当たり、音楽演奏会専用ではない多彩な空間の演出に苦労を重ねながら、アーツマネジメントの貴重な経験を積むこととなった。

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2009>(学内開催分)

●10月23日(金)
東京藝術大学学生による室内楽演奏会(ギャラリー)

●11月23日(月／祝)
相曽賢一朗ヴァイオリン·リサイタル(講堂)

●12月15日(火)
ウィーン古典派 フォルテピアノと木管アンサンブルの饗宴(文化·芸術研究センターホール)

学内活動報告 2

シンポジウム「食と農と地域を結ぶ」開催

文化·芸術研究センター

2月27日、文化·芸術研究センターと法政大学大学院「食と農」研究所との共催により、シンポジウム「食と農と地域を結ぶ—21世紀の持続可能な社会に向けて」が本学176講義室にて開催された。このシンポジウムは「現代社会の重要課題である食と農をめぐる様々な問題を、地域という視点から改めて考える」ことを目的に、食と農の研究者のほか、医学研究者、ジャーナリスト、農業経営者などが講演者、パネリストとして参加した。

はじめに法政大学大学院「食と農」研究所の石坂悦男所長より趣旨説明があり、現在世界で約10億人が飢餓に直面し、地域紛争の要因にもなるなど、食と農をめぐって様々な問題が起きていること、一方で日本の食と農の事情も深刻であり、農業人口の減少と低水準の食糧自給率に改善のきざしが見えず、輸入食品の安全に関わる問題なども生じている、などの問題提起がなされた。

次いで2つの講演が行われ、ジャーナリストの大野和興氏からは、わが国農業の置かれている憂慮すべき事態に加え、低い食糧自給率によって国民の健康な生活も脅かされていることなどが指摘された。また本学文化政策学科の米屋武文教授からは世界人口の将来予測と食の確保の問題及びわが国の食と農の諸問題が整理され、続いて日本の食糧自給率向上に資すると考えられている米粉の利用法についての報告があった。

その後パネルディスカッションに入り、地元浜松の農業経営者、鈴木厚志氏が現在取り組んでいる新たな試みの紹介、「食と農が心の豊かさを育む」という小野寺敏氏(医学博士)の報告などがあり、会場からの質問、意見にパネリストが応えながら、ディスカッションが深められた。

最後に本学上野征洋副学長兼文化·芸術研究センター長がシンポジウム全体を総括し、食と農をめぐる問題の幅の広さ、直面する問題の深刻さの再認識とともに、このテーマに対する市民の意識の高さが指摘された。

編集後記

静岡文化芸術大学は2010年4月に開学10周年を迎えます。今春卒業の7期生まで数多くの卒業生が巣立ち、多方面で活躍していますが、これこそ開学以来10年の多大な教育の成果であることはいうまでもありません。同時に本学はこの間、数々の研究成果も生み出し、その蓄積によって大学としての「もう一つの貢献」を果たしてきたといえるでしょう。『文化と芸術』は今号でVol.11となります。これまでここに紹介された様々な研究プロジェクト、公開イベント、公開講座等は、その時どきの教員、学生の研鑽、努力の賜物であることは勿論ですが、常にそれを支えてくださった地域の方々の存在を抜きに考えることはできないでしょう。10周年を節目として次の10年への新たな歩みが始まりますが、この冊子が「社会への想い」を多くの方々と共有するためのmedium(媒体)となることができればと願っています。(St.)

Art & Culture
文化と芸術
文化·芸術研究センター
ニュースレター
Vol.11
March 2010

発行人:上野征洋　　編集人:冨田晋司
発　行静岡文化芸術大学 文化·芸術研究センター
(事務局　静岡文化芸術大学 企画室)

PRINTED WITH SOY INK
古紙配合再生紙及び大豆インクを使用しています。